

# 子育て家庭への家庭支援のあり方

仲田 智恵子

The way of family support for families with child rearing

Chieko NAKADA

利用者ニーズ 信頼関係と協同の子育て 保育所の家庭支援 地域の家庭支援

## 1 はじめに

わが国では、核家族の増加や地域との関係性が薄れてきている中で、子育て中の親が育児による不安やストレスを抱え、育児ノイローゼや虐待などの様々な問題を引き起こしている現状がある。児童虐待数は年々増加し、厚生労働省の福祉行政報告例によると、相談対応件数は平成24年度66701件の報告があり、虐待防止法施行前の平成11年度に比べ5.7倍となっている。多数の死亡事例も発生し、平成23年度は58人。死亡した子どもは0歳児が4割強といった痛ましい結果が出ている。虐待に至る前に、気になるレベルで適切な支援の必要性が高まっている中で、厚生労働省は、保育所保育指針の改定を平成29年度に告示し、平成30年4月1日に施行の予定である。この改定は①平成27年度から子ども・子育て支援制度が施行されたこと②0～2歳児を中心とした保育所利用児童数が増加したこと③児童虐待相談件数が増加していることなどの社会情勢の変化を受けて見直しが行われた内容となっている。

また②の記載内容にもあるように、厚生労働省の「働く女性の实情」とりまとめにより、25歳～44歳の女性の就業率は昭和60年56.5%から平成27年71.6%と上昇し、労働力人口総数に占める女性の割合は42.9%となった。このように女性の社会進出が進展しており、共働き世帯が増加し仕事と生活の調和（ワーク・ライフ・バランス）の実現が求められている中で、働きながら子育てを

している家庭を支える地域の担い手として、保育所に対する期待が高まっている。

このような子育ての現状を踏まえ、地域子育て支援センターの役割も大きい。1990年代中頃、子育て仲間を求めて「公園デビュー」という言葉がよく聞かれた。公園デビューは幼児が1歳を過ぎてよちよち歩きを始めた頃に、母親が近所の公園に子どもを連れだしそこに集まってくる他の親子連れに仲間入りし、育児情報の共有、保護者同士の交友や気晴らしといった機能もあった。しかし、コミュニケーションの苦手な母親からは、公園デビューに失敗するのではないかとといった不安感が育児ストレスに繋がったという話も聞いた。その後「公園デビュー」といった言葉もあまり聞かれなくなったが、このような場面は、今でも子育て親子が集まる様々な場所で見られるのではないかと推察する。最近公園があってもそこに親子の姿はほとんどなく、子育てがさらに孤立してきている現状もある。子育て支援センターの利用者からは、公園に行っても誰も遊んでいないので子どもの遊び相手がいない。不審者がいないか心配で遊べない。などといった話をよく耳にし、利用目的欄の多くに「他の子と遊ばせたい」と記載してある。

筆者は長年保育所で保育業務にあたり、現在は地域子育て支援センターで相談員として子育て支援に携わっている。本研究では、保育所や子育て支援センターにおいて実施した、保護者を対象としたアンケート結果について考察し、

適宜関連事例を紹介しながら、時代の変化の中で子育て家庭が必要とする子育て支援のあり方を検討することとする。

## 2 保育所の家庭支援

### (1) 保護者アンケートによる取り組み

保育所では保護者のニーズや意見を踏まえ、より良いパートナー関係を築きながら子どもの健やかな育ちの保障と、保護者の求める家庭支援を推進するため、保護者アンケートを実施している。筆者が在職中に行ったアンケート調査を基に支援のあり方を考察していく。

#### 【保護者アンケート】

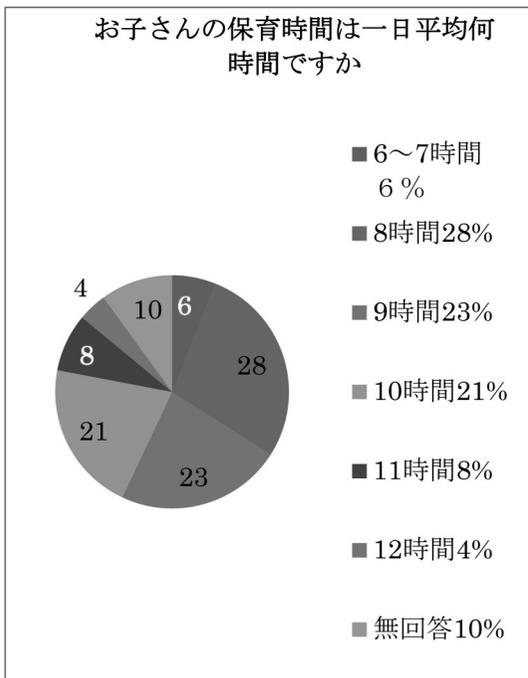
対象世帯数 150世帯

回収率 80%

(質問1)

〇お子さんの保育時間は一日平均何時間ですか？

図1



#### 《考察》

保育時間が9時間を超える家庭が約3分の2近くという結果だった。子どもは長時間保育所で生活している。子どもたちが生活する保育所の環境がいかに大切であるか、改めて考えさせられる。子どもが一日の保育所生活を安心して

安全に過ごせるように、保育所では保育室の環境を整えできるだけアットホームな雰囲気にし、子どもが好きな遊びを主体的に自由を楽しめるコーナーや、疲れたら休息できる空間を作るなどの工夫をしている。また、保育士は子ども一人ひとりとスキンシップを十分に図りながら、子どもの心情を捉え適切な援助ができるように努めている。保育者のかかわりや生活・遊びの環境は日々の振り返りの中で、見直し改善を積み重ねていくことが大切であり、この取り組みが保育の質を高め、子どもの豊かな育ちや保護者の安心に繋がっていくと考える。

家庭は親子の大切なかかわりの場であり、子どもにとって家庭に代わるものはない。家庭で過ごす時間が短時間でも親子が穏やかに密に過ごせるよう、保護者の仕事と子育ての両立を支援していくことも保育所の大きな役割である。

次の事例は親子で過ごす時間の提案として保育所が取り組んでいったことの一つである。

#### 【事例1】～絵本の読み聞かせを通して～

親子が触れ合いながら一緒に楽しみ心豊かに過ごせる時間を持てるように絵本の読み聞かせを薦めていった。素敵な絵本に出会えるように、絵本だよりを定期的に発行し、年齢に適した絵本の紹介や保育所で興味を持ち楽しんで読んでいる絵本の情報、子どもの姿などを伝えていった。それをきっかけに読み聞かせを始めた保護者もたくさんいた。また、絵本の貸出や絵本講座の開催、ボランティアによるお話し会なども定期的に行い、子どもたちが絵本に親しめるようなコーナーを作るなど、環境づくりに努めていった。このような取り組みを通して、絵本への関心が高まり、一日の生活や遊びの中で絵本を楽しみながら見ている姿が増えた。家庭でお母さんやお父さんの膝に抱かれ絵本を読んでもらう時間はさらに安らぎのひとつとなっていたことであろう。「本を何冊か読んでいるうちに一緒に眠ってしまいました!」「兄弟がいるとなかなか上の子どもとじっくり向き合えず我慢させていることが多いのですが、この時間は〇〇ちゃんとお母さんだけの時間ね!と伝え、毎日絵本を読んであげています。上の子はこの時間をとっても楽しみにしています」と話して

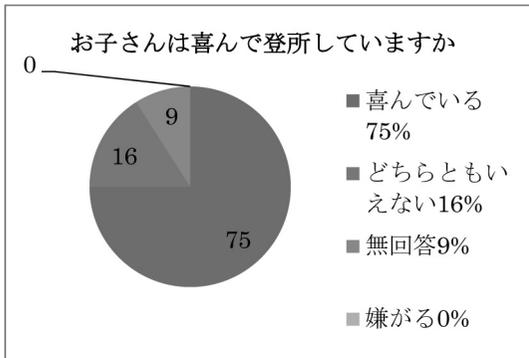
## 子育て家庭への家庭支援のあり方

くれたお母さんの笑顔から、子どもとの心地よい時間を過ごせたことが伺えた。

(質問2)

○おおさんは喜んで登所していますか？

図2



(喜んでいる理由)

- ・保育者が抱っこや笑顔で受け入れてくれる
- ・保育士や友だちと遊ぶことを楽しみにしている
- ・好きな遊びや、いろいろな経験ができる

(喜んでいない理由)

- ・いまだに泣くことがあるから
- ・休み明けは嫌がる

《考察》

喜んでいる理由として、保育者との関係性や友だちと楽しく遊んでいる姿を見て、子どもが喜んでいると感じている保護者が多い。このような子どもの姿は、保護者の保育所への安心感と信頼感に繋がっていくと考える。特に年度初めの4月は新入所児も多く、子どもたちも気持ち不安定になる。保護者も仕事復帰で生活環境が変化する中での不安も大きい。そんな時、保護者の何よりの不安解消は「子どもの笑顔」であることを保護者の姿から見るができる。保育所では、子どもが一日も早く安心して過ごせるようになって欲しいと願い、子どもに寄り添いスキンシップを十分に図りながら子どもの気持ちを受けとめ保育している。このような保育者との関わりの中で子どもは保育者を信頼し本来の姿を十分に発揮して安心して生活していく。

次の事例は朝の受け入れ事例である。

【事例2】

新年度が始まり間もない頃、3歳児のAちゃんはお母さんからなかなか離れられずにいた。担任保育士はAちゃんの姿を見つけると「Aちゃんおはよう！」と笑顔で駆けてき、Aちゃんの手をとり保育士の頬に寄せて「Aちゃんのこと、待ってたよ！いっぱいあそぼうね」と声をかけながら、ぎゅっと抱きしめた。このようなやり取りがしばらく続いたある日、Aちゃんはニッコリした顔でお母さんと離れることができた。お母さんも安心した様子で預けていった。後日のおたより帳に「初めての保育所の生活で心配でしたが、Aは先生が好き！と、言っていました。少し安心しました。私も頑張ります！今日もよろしくお願ひします」と書かれてあった。親は我が子が保育士のもとへ笑顔で抱きついていく姿や、友だちと楽しそうに遊ぶ姿を見て安心し一日元気に頑張れる。この日々の関わりが保護者支援に繋がっていることを思う。

次の事例は反省点として挙げる

【事例3】

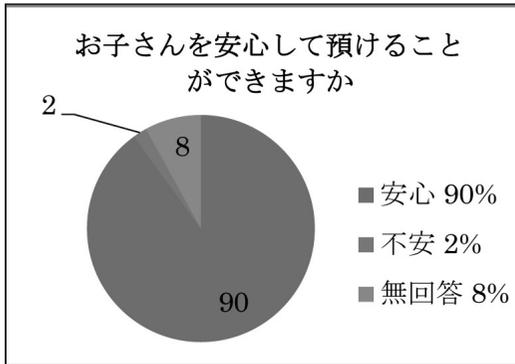
ある朝、母と子で登所してきた親子の母親が突然「今日は家に帰ります！」と怒りながら子どもを連れて帰ってしまった。母親に理由を聞いてみると、挨拶の仕方に腹が立った。担任は通りすがりに「おはよう」と声をかけただけで去っていった。子どもを預ける気になれなかったと話があった。担任は他用があり急いでいて通りすがりに「おはようございます」と声をかけたとのこと。この事例から保護者が気持ちよく安心して子どもを託していけるような受け入れの仕方について職員間で話し合っていた。保育所の一日を通して保護者とコミュニケーションがとれる時間は登降所時が主であり、貴重な時間である。この大切な時を親子と丁寧に向き合い気持ちを込めて受け入れをしていくことは最も重要であることを再認識した出来事であった。

保護者からの意見や苦情は、保育内容を見直すきっかけとなる。真摯に受け止めそこから課題を見つけていくことが保育の質の向上に繋がっていく。

(質問3)

○お子さんを安心して預けることができますか？

図3



(安心している理由)

- ・ 職員の対応に安心している (親切・丁寧・何かあるとすぐに報告してくれる等)
- ・ 楽しそうに過ごしている・喜んで通っている
- ・ いろいろな経験ができ、成長がみられる
- ・ 教育理念に共感できる

(不安がある理由)

- ・ 友だちと仲良くできているか心配
- ・ 引継ぎがしっかりできていない時があった

《考察》

質問3の結果も質問2と共通した回答であった。子どもは保育所で過ごす様々な活動の中で日々成長していく。この姿を保護者にエピソードとして伝えていくことはとても大切な事である。おたより帳、クラスの掲示板、クラス日より、各種のおたより、口頭、懇談会、個人面談等を通して伝える工夫をしているが、中でも子どもの姿を伝える毎日の連絡ノートは保護者が一番楽しみにしており、子どもの成長記録として宝物のように大切に保管していることを保護者から聞いている。

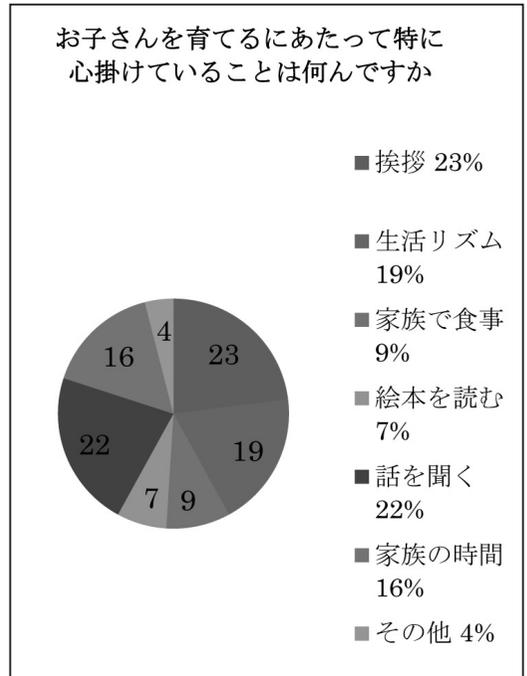
子どもを持つ親の大半は我が子を心から愛し、我が子が健康で毎日友だちと元気に遊びながら健やかに成長してくれることを願っている。子どもの成長を身近に見たり聞いたりすることは大きな喜びであることを保護者の日々の様子やアンケートからも伺える。親子は一心一体である。子どもの成長は保護者の保育所に対する安心感と信頼感に繋がり、そのことがまた

子どもの健やかな成長にも繋がっていく。保育所はこの親子関係をしっかりと受け止め、保護者を支え、連携し協同で子育てをしながら、子どもの成長を共に喜び合い、子育ての楽しさを伝えていくことが大きな役割であることを改めて思う。

(質問4)

○お子さんを育てるにあたって特に心掛けていることは何ですか？

図4



(その他)

- ・ マナーやルールを守ること
- ・ 安心感を与える
- ・ 感性を育む
- ・ 子どもの意見を尊重する
- ・ 食育・栄養のバランス
- ・ 自分のことは自分でできるようにする

(質問5)

○子育てで困っていること・悩んでいることはありますか？

- ・ 昼寝をしない。早寝早起きの習慣づけがうまくいかない
- ・ 好き嫌いがあり食べない・食べるのが遅い

## 子育て家庭への家庭支援のあり方

- ・自分でやろうとしない・できない
- ・トイレでうんちができない・夜のおねしょ
- ・反抗期で「ヤダ！」が多く悩む
- ・言葉より手や足が出る
- ・服をかんだり、爪を噛んだりする
- ・話を聞かない、問いかけても答えが返ってこない
- ・挨拶ができない
- ・ゲームは時間を決めているがゲーム脳が心配
- ・迎えにいくと一人であそんでいること
- ・仕事の関係で行事に参加できず可哀そう

### 《考察》

保護者が子育てで大切にしていること、困っていること、悩んでいることを保育所が共有し子育てのパートナーとして寄り添いながら共に考えていくことが保護者支援に繋がっていくのではないだろうか。

質問4で特に心掛けていることとして生活リズム19%といった回答があった。(図4参照)生活リズムは子どもの成長発達において様々な影響を及ぼすものであり、保育所においても子ども一人ひとりの生活リズムを守り規則正しいリズムの中で子どもの育ちを保障していくことを大切に考えている。子どもは24時間のリズムの中で成長している。生活リズムを整え情緒の安定した生活を保障するためには保育所と家庭の連携が必要となる。しかし、現代は子どもが大人の生活時間に振り回されている現状がある。親の就労形態も様々であり、夜遅くコンビニやファミリーレストラン、カラオケ等で親子連れを見かけることもある。22時過ぎに寝ている3歳児は、昭和55年調査では20%未満であったが、平成22年の調査では、夜10時以降に寝ている2歳児が35%と3人に1人という結果が出ている。夜更かしは子どもにとって必要な睡眠時間を不足させ、子どもの成長に欠かせないホルモンの分泌が抑制されてしまう。その結果自律神経機能を弱め、落ち着きがない、集中できない、切れやすい、友だちと協調して遊べない等の姿として現れる。この姿は家庭においても同様であろう。親をイライラさせ、親子関係にも影響していくのではないだ

ろうか。次のような事例がある。

### 【事例4】

登所時間が遅い、欠席も多い、友だちとの関係でもトラブルを頻繁に起こす5歳児がいた。保育所ではその姿が気になり、母親と面談し、家庭の様子や母親が子育てで悩んでいることはないか聞くことにした。親子の登降所の際に、できる限り母親とコミュニケーションを図り、関係性を築きながら面談の約束をした。家庭の様子を聞くと子どもとの関わり方に悩んでいた。子どもと言い合いになることが多く、イライラし怒ってしまう。無視するとそのことに腹を立て、さらに子どもは大泣きとなり延々泣き続ける。そのやりとりで就寝時間が0時頃になることもある。そんな日は朝起きられないので保育所を休んでしまうといった話だった。

生活リズムの乱れが親子関係に大きく影響を及ぼしているのではないかと推察し、面談の中で、就寝時に分泌される子どもの成長に欠かせない大切な成長ホルモンの話をしながら、就寝時間を整えていくことを一緒に考えていった。一年後に小学校の就学も控え、母親は脳の成長や賢く育てることに特に関心を示していたので、面談後は生活リズムを整えていくことに努力する姿が見られるようになった。母親が頑張る姿を認めながら、「まずは出来るところから始めましょう！」と励ましていった。就寝時間が徐々に早まってくると怒る、泣くといったトラブルも減り母親のイライラも減少していった。それに伴い子どもも徐々に落ち着いてき、親子で穏やかにかかわり合う姿が見られるようになっていった。

保育所に入所する子どもの背景には様々な家庭環境がある。一人親家庭、障害や慢性疾患のある子どものいる家庭、精神疾患を抱える保護者、外国籍の子ども、虐待の疑いのある場合など個別支援を必要とする家庭もある。それぞれの家庭状況により保護者の抱える子育て不安も大きく、そのことがストレスとなり子育てに様々な影響を及ぼすこととなる。保育所は一人ひとりの家庭状況を把握し、保育士等の専門性や保育所の環境を生かしながら支援していくことが責務である。専門機関との連携も必要にな

る場合もあり其々の状況に応じて適切な支援が求められる。

(2) 保育所の地域における子育て支援

保育所は、保育の専門的機能を地域の子育て支援において、積極的に展開することが求められている。地域の実情や保育所の体制を踏まえ地域の関係機関等と連携し、地域の子育て支援を行っている。

取り組み内容としては、保育所の庭を毎日開放し遊びに来た親子の受け入れ、保育所が地域交流事業として地域の子育て中の親子や高齢者等に向けて企画する人形劇、コンサート等へのお誘い、また、電話・来所による子育て相談に応じている。

その事例を挙げる

【事例1】

地域交流会の活動の中で、どろんこや色水あそびのコーナーを設定した。参加した子どもが砂や水、泥んこに触れて喜んで遊んでいる姿を見て、「家ではとてもできないことで、こんな体験ができて良かったです。また遊ばせてください」とお母さんが嬉しそうに伝えてきた。

【事例2】

地域の民生委員や民生児童委員等が、地域の子育て親子に向けて開催する「親子ふれあい遊びの集い」に保育所職員が出かけ、一緒に遊びながら親子が楽しく遊べるよう支援した。その際、保育所での遊びを紹介し保育所を気軽に利用できるようにお誘いした。このことをきっかけに保育所を訪れる親子も増えた。

【事例3】

民生児童委員からの依頼で保育所入所前の2歳児対象に保育所体験の受け入れをした。親子で保育室内や庭で保育所の子どもたちと一緒に遊びながら過ごしていった。参加者から「保育所の生活がわかり安心しました」と報告があった。

【事例4】

地域の自治会が主催した避難訓練に保育所の子どもたちが地域の親子と一緒に参加した。消防車の見学や災害時の避難、けが人の搬送など体験した。地域の取り組みと一緒に参加することは住民との繋がりができ、保育所が地域に根

ざし、地域の住民と連携しながら子育てを見守っていくことができる。この地域では近隣公園の不審者情報を伝えてくれたり、保育所の周辺を巡回してくれたり、送迎時の駐車場所の問題でも協力を得ることができ、保育所を地域の一人として見守ってくれた。

《考察》

保育所は地域の子育て家庭に向けた支援に努めているが、現状は保育所に気軽に遊びに来る親子は少ないと感じる。在宅で育児をしている親にとって、保育所は入所している子どもの施設であり、入所していない子には関係ないところと思っているのではないだろうか。

平成20年に保育所保育指針が改定され、保育所は地域の子育て支援の拠点として、子育て家庭への保育所機能の開放、相談や援助の実施、交流の場の提供及び交流の促進、地域の子育て支援に関する情報の提供を積極的に行うよう努めることと示された。このことを受けて事例に記載したように、保育所では地域への発信や受け入れを積極的に行ってきた。以前より保育所が地域の施設として認識され敷居が低くなってきているが、地域の子育て支援の役割を果たすにはさらに積極的は取り組みの工夫が必要である。

3 地域子育て支援センターの取り組み

筆者が勤務する地域子育て支援センターは、保育所併設型であり、この環境を生かした子育て支援について考察していく。

利点としては次の①～⑤のような内容が考えられる。

(1) 保育所併設型の利点

- ①安全な環境の中で外遊びがたくさんできる。
- ②保育所の子どもたちと触れ合い一緒に遊ぶ体験ができる。
- ③利用者は保育所で過ごす子どもたちの姿を見て保育所生活を理解し、就労に向け安心感を得られる。
- ④保育所内には保育士の他に看護師、栄養士等の専門職が配置されており、必要に応じて子育て相談に応じることができる。

## 子育て家庭への家庭支援のあり方

⑤ 保育所見学者は見学後に施設を利用し遊びの体験ができる

### (2) 支援内容

#### ① 子育て親子の遊び場の提供と交流の促進

- ・親子が十分にふれ合いあそべる環境つくや子どものかかわりを援助する。
- ・親子で遊べるふれあい遊び、わらべうた、手遊び、季節の歌、パネルシアター、体操等の遊びを紹介する。
- ・利用者同士が気軽に交流を図れるような環境をつくり、子育ての情報交換ができるようにする。
- ・親子でおもちゃ作りを楽しみ、作った玩具は家庭に持ち帰り、親子で一緒に遊べるようにする。
- ・「お父さんと遊ぼうの日」を月1回計画し、父親の育児参加の促進及び母親の育児ストレスの解消を図る。
- ・「親子遊びの日」を月1回計画し、保育所の子どもたちと一緒に触れ合い遊びを楽しむ。

#### ② 育児相談

- ・オープン相談・個別相談・電話相談

#### ③ 育児講座の開催

##### (講座内容)

- ・生活リズムと良い習慣
- ・離乳食の進め方
- ・子どもの病気と怪我予防
- ・トイレトレーニング
- ・イヤイヤ期のかかわり方
- ・絵本について
- ・子どもの遊びとかかわり方

#### ④ 地域の子育て関連情報の提供

- ・地域の子育て支援に関連する施設の情報を掲示やパンフレット等を配布し伝える。
- ・保護者から情報を求められた場合には、できる限り情報収集し応じる。

(例) 近隣の医療機関、保育所・保育園、一時保育、特定保育、ファミリーサポートセンター、病児・病後児保育、リラックス館等の子育て支援機関等

(3) 地域子育て支援センター利用者状況  
(平成27年度調査)

利用状況は年間利用組数が約5000組。利用年齢は、0歳児約34.5%、1歳児46.5%、2歳児16%、3歳児0.2%、4歳～6歳が2.8%と0歳～1歳児の利用が81%と大半を占めている。その中で、第一子の利用者が84%と最も多く、初めての育児に不安や悩みを抱えている保護者が、子育て支援の機能をもつ施設を頼りにし求めていることが伺える。また、2歳児以降の利用が少ない理由として考えられることは、育児休暇を取得している保護者の大半は子どもが1歳～2歳くらいになると保育所入所を希望し仕事に復帰していく。最近では幼稚園が2歳児から入園を受け入れているところもあり、幼稚園を2歳から利用する子どももいる。

#### ○利用者の年齢

20代	30代	40代
12%	67%	21%

#### ○施設を何で知ったか

友人・知人	44%
インターネット	22%
保健センター	13%
市政だより	1%
民生・児童委員	1%

#### ○利用日数

週1回	30%
週2回	31%
週3回以上	1%
週1回未満	36%

#### ○年間育児相談内容

##### 【基本的生活習慣】

	分類	相談件数
1	睡眠	39
2	授乳	16
3	離乳・離乳食	64
4	食事	45
5	排泄	20
6	その他	19
	小計	203

【発育発達】

7	身体の発達	3 2
8	言語	1 7
9	社会性	3 1
1 0	性格	6
1 1	気になる行動	2 2
1 2	その他	4 9
	小計	1 5 7

【医学的問題】

1 3	病気・怪我	2 1
1 4	予防接種	3
1 5	その他	1 3
	小計	3 7

【生活環境】

1 6	家庭	1
1 7	近隣・地域	0
1 8	保育園・幼稚園	9
1 9	その他	1
	小計	1 1

【育児方法】

2 0	子どもとの関わり	2 2
2 1	しつけ・教育	4
2 2	自分自身の問題	7
2 3	その他	1
	小計	3 4

【問い合わせ】

2 4	入所（入園）	4 1
2 5	一時・特定保育	2
2 6	その他	0
	小計	4 3

相談内容を見ると、離乳・離乳食、食事に関する相談件数が多い。赤ちゃんが母乳やミルクでの栄養摂取から離乳食を始める頃になると、お母さんの心配は赤ちゃんの食事に集中する。初めて子育てを経験するお母さんにとって、毎日の食事は大きな関心事である。赤ちゃんの中には良く食べてくれる子、なかなか食べてくれ

ない子と様々で、子どもの状態により母親の不安やストレスも大きい。

睡眠も一定時間ぐっすり眠ってくれる子、頻繁に目覚め泣く子、抱っこで眠り布団に移すと目覚めてしまう子等、赤ちゃんのタイプにより、母親の育児疲れやストレス度も異なる。

子どもの身体発達は寝返り、ずり這い、おすわり、這い這い、つかまり立ち、伝い歩き、歩行に至るまでの間、一人ひとりの発達過程は様々であるが、同月齢児との比較や育児書、インターネットによる情報などを見て違いがあると不安になり、相談してくる母親は多い。1歳半を過ぎる頃にはイヤイヤ期のかかわり方やトイレトレーニング、言葉の発達等、子どもの成長と共に心配事も変わってくる。

支援センターではこのような保護者の思いを受け止め傾聴しながら、子育てを共に考えアドバイスできるようにしている。

相談事例

【事例1】

歩行ができるようになり探索活動が活発になってきたAちゃん。興味のままにあちこちと動き回り、今までお母さんと一緒に参加していたふれあい遊びも途中で立ち歩き落ち着かない。ある日お母さんが「他の子はちゃんと参加できているのに、この子はフラフラと落ち着きがなくて発達は大丈夫ですか？」と心配そうな表情で保育士に相談してきた。子どもの成長の姿であり、探索活動がとても大切な遊びあること、大人の思いで子どもの行動を無理やり制限すると、かんしゃくを起こしさらに関わりが難しくなることを伝え、この時期のかかわり方をアドバイスすると、母親はホットした様子で、その後は無理に参加させず、子どもの思いに寄り添いながら子どもの行動に付き合い過ごす姿に変わっていった。

【事例2】

ある日、初めて訪れたお母さんがとても暗い表情で他児とは距離をおいて遊んでいた。お母さんの様子が気になり、話しかけていくと「この子はすぐに他の子に近づき、大きな声を出して威嚇するので相手が怖がって嫌がる。保護者

## 子育て家庭への家庭支援のあり方

からも傍に寄られると嫌そうな顔をされた。我が子は動きが他の子より早くて異常ではないか？」と相談してきた。発達には個人差があり、平均より早い子も遅い子もいること。赤ちゃんでも人との触れ合いは心地よく、社会性が芽生えてくると他児に興味を示し、傍に行き声を出したり、玩具に手を出したりする姿が出てくること等を伝え、子どもの気持ちに寄り添ったかわり方をアドバイスした。その後はお母さんの表情も日に日に変わり、支援センターで子育て仲間もでき、子育てを楽しめるようになった。

### (4) 利用者の感想

#### ○満足度

- |                     |      |
|---------------------|------|
| ・親子で過ごす場所ができる       | 100% |
| ・他の保護者とおしゃべりや交流ができる | 97%  |
| ・子育て中の友人ができる        | 84%  |
| ・子どもが楽しく遊べる         | 98%  |
| ・子育て相談ができる          | 100% |
| ・子育て関連情報が得られる       | 98%  |
| ・育児講座で知識を得ることができる   | 90%  |

#### ○感想

- ・アットホームな雰囲気居心地が良い
- ・園庭で保育所の友だちと同じ空間で遊べ、良い刺激になる
- ・子どもが安心して遊べる環境が整っている
- ・子どもが手遊びなどのふれあい遊びをととても楽しんでいる
- ・生後3か月頃から毎日のように通い、孤独な子育てから救われた
- ・スタッフや他のお母さんに子どもの名前を覚えてもらえて、一緒に見守っているという感覚にホットする
- ・何気ないスタッフの方々との会話から子育ての悩み事が解決し、子どもの発達の観点からアドバイスしてもらえ頼りになる
- ・同年齢の子どもと触れ合う機会になりとても良い
- ・外遊びができるので体を使って遊ぶことができ嬉しい
- ・スタッフの声掛けが適切で勉強になる

### 4 まとめ

親子が支援センターを利用する目的は様々であるが、いずれは子どもの成長と共に保育所や幼稚園に入所、入園の時期を迎え巣立っていく。利用者は初めて子育てを経験する保護者が多く、年齢も0歳～1、2歳児が大半を占める。特に人間の生涯の中で最も成長の著しいこの時期は子どもの日々の成長の喜びも大きい、かわり方に悩み育児ストレスに繋がることも多いのではないだろうか。事例にもあるように子どもの発達は個々に異なる。大半の子どもがいずれは歩行し、言葉を話、友だちと一緒に遊べるようになっていくが、育児書通りでなかったり、他児と比べて悩んだり、保護者の心配は尽きない。

子育て支援センターは、そうした育児の悩みや不安を抱える保護者の気持ちに寄り添いながら話を傾聴し、子どもの発達の過程は一人ひとり違うことを丁寧に具体的に伝えながら、「大丈夫ですよ！お母さん。○○ちゃん、ほら、興味のあるおもちゃに手を伸ばして前に進もうとしていますよ。みて、みて、すごい！もうすぐ這い這いが始まりそうですね！」・このように子どもの成長に気付けるような言葉掛けや、保護者と共に成長を喜び合い「子育ては楽しい！」と感ずることができるよう援助し、親子を見守り支援していくことが大きな役割であろう。

また、支援センターが実施している育児講座は、子どもの発達を分かりやすく伝えながらその時々の子どもへのかかわり方をアドバイスしている。こうした取り組みも子育て支援においては有効である。講座後のアンケートには「子育てのヒントがもらえ参考になった」「知らないことが沢山あり受講してよかった」「さっそく実践してみます」「主人にも聞かせたかった。今度、一緒に受講します」等の感想が多く寄せられる。

その他、保護者同士が育児の情報交換をしながら子育て仲間をつくり、子育てを楽しめるよう支援することも役割の一つである。子育て支援センターで出会い、子育ての情報交換しながら保護者同士が親しめ合えるようになると、お

母さんの表情も明るく変わってくる。仲間ができるということがこんなにも子育てに大きく影響するのかと驚くほどである。逆に子育ての孤立が、どんなに子育てに不安に繋がっているかと考えさせられる。このように自ら子どもの遊び場を求めて利用してくる親子もいるが、家庭に引きこもっている親子もいるであろう。その把握は難しいが、利用者が、子どもの健診などで出会った親子に支援センターの存在を伝えてくれたことがきっかけで訪れる方も多い。保健センターからの紹介もある。子育ての孤立をなくし、母親が一人で育児を抱え込まないように様々な機関と連携し、地域の子育て支援を推進していく必要がある。

支援センターではそこで親しくなり、他のサークル活動を始めた方もいた。このように支援センターがコミュニティーの場となり、保護者同士が子育て仲間の輪を広げる活動のきっかけとなっていくことが支援の望ましい姿ではないだろうか。

これまで保育所や地域子育て支援センターの家庭支援の取り組みを利用者のアンケートや事例から考察してきたが、家庭には様々な背景があり、その内容により保護者の抱える不安も一人ひとり異なる。保育所や地域子育て支援センターは、子育てのパートナーとして、保護者と協同の子育てをしながら保護者の不安を受け止め、少しでもその不安を軽減し、保護者が子育ての喜びや楽しさを実感できるように援助していくことが、最も家庭支援に求められることではないだろうか。それには信頼関係を築きながら常に保護者の思いに耳を傾ける援助者の姿勢が重要であろう。

《参考文献》

- ・河添邦俊・河添幸江著乳幼児の一日の生活のしかた（生活リズムの確立）  
子ども総合研究所出版
- ・厚生労働省福祉行政報告書例を引用「子どもの虐待の現状」
- ・厚生労働省ホームページ「平成 27 年度版働く女性の実情」
- ・ジョブデポ「保育所保育指針の改定と改定後

のポイント」

- ・日本小児保険協会実施調査「平成 22 年度幼児健康度調査」
- ・保育所保育指針
- ・M 保育所「平成 20 年度保護者アンケート」
- ・C 市子育て支援センター「平成 27 年度利用者アンケート」